

# 審判

吉田 朗

W1400×D1400×H2300mm

鉄、木、ゴミ、ゴミ袋、

## はじめに 私の目に映る古利根沼

私はこの沼を訪れるときは、JR成田線湖北駅から歩いて向かう。駅近くの団子屋兼総菜屋でのり巻きを買い釣り場への足を速める。ガソリンスタンドの角を右に入るあたりから、緑の香りがし始める。最後のスーパーを越えると、古くからの農家なのだろうか、塀に囲まれた大きな家が左手に現れる。それを越えた下り坂をおりると、左側にはもう、うっそうとした森が古利根の水面を隠すように横たわる。ここまで駅をおりて20分ぐらいだろうか。

草木をかき分けながら、やっと水面にたどり着く。外からの印象と中からの印象、つまり沼を周りから見た光景と、沼の上から見た光景が全く異なっていることに、毎度のことながら驚かされる。特に利根川側から見た南側の岸部はここが首都近郊のベッドタウンであることを完全に忘れさせてくれる。

木々の背は高く、裏側の住宅は気配すらも感じられない。東側の南岸は遠浅気味になっており、ゆったりとしたたずまいを見せる。この景色を前に釣り糸をたれていると、不意に音が完全に奪われる瞬間が訪れる。決して森も深いわけではないのに、外界のせわしない動き達を完全に消し去る力を持っている。いわば緑の完全なる屏風に囲まれた水面とでもいおうか。

## コンセプト

古利根の自然と私達の関係を視覚化する。屏風のような森に守られた水面。屏風は高く美しいが、決して厚くはない。それは私達が木々が生きれる場を定めてしまったから。そしてこの木々も官と民の狭間で運命は浮遊したままである。生息可能区域の限定、そして、その限られた場ですら今、危うい。そんな現状を自分の仕事と結びつけ、表現したい。

1.4四方の鉄板に穴をあけます。ここが私の定める木が生きれる場所。ここに植樹を行い、生育を待ちながら、同時に、ここ古利根に私達が残した爪痕を探します。

この水辺にゴミを置いていくことを、この沼が無くなってしまわない、という意志と捉え、その票を拾い集めるのです。

最後に木々を脅かす力の象徴として、100本の棘を鉄で束ねた、責め具を、植えた木の上の宙に浮かせ、その上に、ゴミの票を袋に入れ、積み重ねていきます。この責め具が、ゴミの重さで落ちていくことはありません。しかし、視覚的な審判の役割は十分に果たせるものです。

## スケジュール

- 8月下旬 古利根沼に面した作品設置場所に鉄製の土台部分を設置。その後、鉄板の円形の穴の中に植樹を行う。
- 9月 樹の育成を見守る。同時に古利根沼周辺のゴミ集めを行う。
- 10月初旬 作品上部の棘部分を設置。拾ったゴミを棘の上に積み上げる。必要に応じゴミはロープで固定する。
- 11月初旬 作品を撤去。

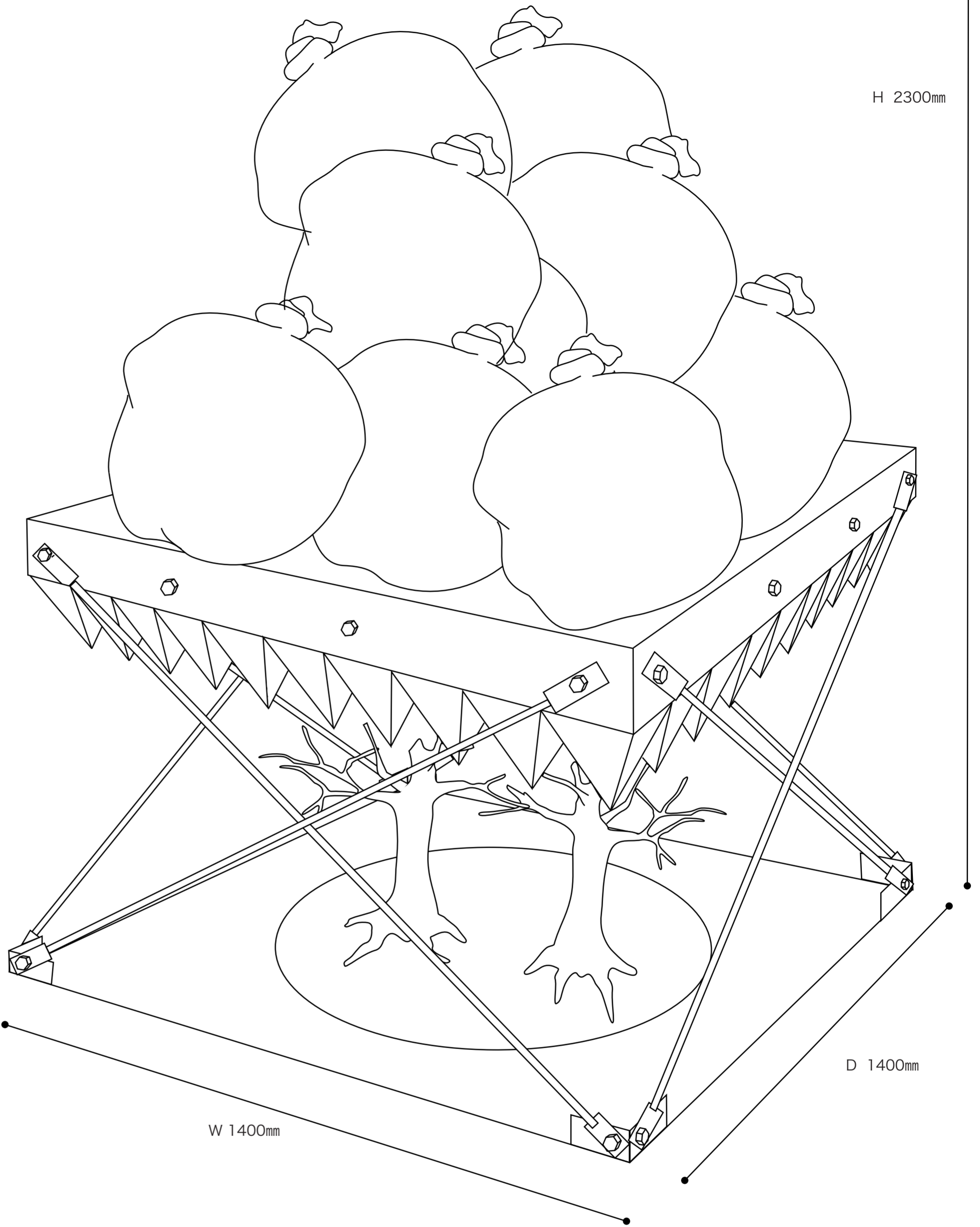
## 希望設置場所

小堀地区1, 2, 4のいずれかを希望。

## 作品予算

往復運送費	約2万5千円
ゴミ袋、木、他	5千円
計	3万円

作品の主要部分は過去に制作したものをリサイクルするため材料費はほとんど無し。



## リサイクル前の作品

### 共生2002

2002年  
鉄、木、ミクストメディア  
1400×1400×2995mm

とげが下に行くと結ばれた縄が下に引かれ、滑車を伝って縄は上に向かう力に変わる。

縄の先には首がくくれる輪が用意されている。共に生きるとは、苦しみも悲しみも分かち合うことから始まるものではないだろうか。

私たちは生きる中で自然と共に生きているのだろうか？私の答えはノーだ。自然とは共に生きていない、頼っていて、依存していて、搾取していて、寄生している。にもかかわらず私たちは激しく自然を傷つける。

いつか見切られるときがくるのだろうか。

ともに苦しむ。自然を痛めた分だけ自分も痛められる。そんな関係がないと私たちは気付けない。

